アーヴィング・バビットのジュベール論

角倉康夫

ない。しかし、バビットがきわめて共感的に書いているのは彼についてであると思われる。このジュベール論のの そこには、バビットその人のものの考え方などもうかがわれるので、これを紹介したいと思う。 中で語られているジュベールの人と思想は筆者には好ましく思われ、かつ、興味をそそるものがあるとともに、 り上げて論じる批評家は十一名に及ぶが、その一人、ジュベールに与えられているスペースは必ずしも大きくは 『近代フランス批評の大家たち』 (The Masters of Modern French Criticism) (一九一二) においてバビットが取

更したり、補足したりしたところがあることもことわっておく。 にとどまらない。なおまた、バビットの引用するジュベールの随想や手紙は、これを原典と照合していくらか変 ない。筆者はそれらの引用文句の出典をつきとめようと努めたが、力及ばず、未詳のままに残したものは二、三 「現代のもっとも博学な人の一人」であるバビットは引用の多いことでも有名であるが、本論もご多分にもれ

よると、スタール夫人を十九世紀初頭におけるルソー的熱狂の典型とすれば、ジュベールはプラトン的熱狂の代 『近代フランス批評の大家たち』はスタール夫人論にはじまり、ジュベール論がこれにつづくが、バビットに

常軌からの逸脱を進歩と信じた。 いての観念によってこれを堕落させてしまった。 ジュベールはスタール夫人を手きびしく批判する。彼女は天賦の倫理的才能にめぐまれながら、その熱狂につ 激情は、彼女の見るところでは、一種の威厳と光栄であった。」ジュベールは 「彼女は魂の熱狂的興奮をその能力と考え、 陶酔を力と思い、

ある手紙の中で書いている――「私は彼女についぞ会ったことがない。私は彼女に会うことを何度も何度も避け

た。彼女は私には命取りの、有害な存在と思われた。」

ることは可能である」といっているが、いま述べたようなジュベールのスタール夫人にたいする態度はまさしく 場合に示そうとしたように、まったくやさしく、温情的でありながら、同時に、きわめてきびしく、 用いたことを残念に思った。」『近代フランス批評の大家たち』の「結語」の中でバビットは「私がジュベールの 女の死を心から哀悼した人の一人はじつにジュベールであった。「あのような名声の不運はほんとに私をこの上 のことを思い、慰めるすべもないにがにがしい気持で、あのように豊かな知性と能力と善良さとを彼女が誤って なく悲しませた。そうしてこの女性のことをだれひとり思おうとしないのを知ったとき、私はただひとりで彼女 ジュベールにとってはスタール夫人とはこういう女性であったが、彼女が他界し、そのふ報がつたわるや、 彼女をとりまいて大騒ぎをしていた世の人たちの示した反応といえば冷淡と沈黙であったのにひきかえ、

ジュベールは二十四歳のとき、 心を奪われ」ていた。 ジュベールは在世中、世間的にはまったく無名であった。彼はみずからいうように「栄光よりはむしろ完全に マシュー・アーノルドのいう「完全の追求」が思いあわされる。そのアーノルドによると、 文学的野心を抱いて上京し、のちに有名になった文人たちとまじわりを結んだが、

そういうジュベールを示すものということができよう。

その頃すでに彼のそういう生きかたは気づかれはじめていた。アメリカの大学では'Publish or perish'とかい うと聞いたことがあるが(日本の大学でいえばさしづめ業績主義とでもいうところであろうか)、これまたアーノ 有名に

性よりも、行動や実践、あるいは社会的参加や変革ということの方を大事にする傾向がある」今日では、わい小、 博するよりは自己完成に熱中するという。奇特としかいいようがない。ただし、そういう態度は、「観念や内面 なりたいとはもっとも抗し難い誘惑の一つであり、そうなりたいと願わぬものはまずなかろう。なのに、名声を ルドによると、ジュベールは発表することより研究することを変ることなくえらんだということである。

自己中心主義としてかたづけられかねない。「完全の追求はちっぽけな人間のしるしである。」 『随想録』(Pensées) はシャトーブリヤンとサント゠ブーヴによってフランスの読者に、マシュー・アーノルドに 無名ではあったが、ジュベールは生前の交友関係、死後の名声という点で不思議なほどめぐまれていた。彼の

よって英国の読者に紹介された。

サーが詩人中の詩人といわれてきたように、ジュベールは批評家中の批評家と見なされるにいたった。 ジュベールは「華麗な簡潔さ」こそ最高の文体美であると断言したが、彼自身そういう文体の才能を持ってい

バビットによると、ジュベールの文学に関する随想はきわめて上質の批評的洞察力を示しているので、スペン

るようにする――これが彼の野心であった。 られて私のペンからしたたり落ちるまで待つ」のである。えもいわれぬものに表現を与え、それを一般に通用す 彼が磨くのは言葉づかいではなくて、観念であり、 「私は私の必要とする光のしずくがかたちづく

ュベールが「私は、モンテーニュと同じように、連続した談義には向かない」といっても驚くにあたらない。彼 ところで、えもいわれぬものばかりから成り立っている一連の談義などというものは想像し難い。

には「つなぎとなる観念」の持ちあわせがない。哲人は構成し(compose)ないというジュベールの言葉でバビッ

域に達するには、人は雲のあいだを通ってゆかなければならない。そこに立ち止まる人もあるが、その外に出る あまりに徴妙になることにともなうこのような不利をジュベール自身、必ずしもまぬがれてはいない。 に、つなぎとなる観念を欠く批評家にとっての危険は気どり、わかりにくくなるかもしれないということである。 トが思い起こすのは、自分のエッセイ中の文は無限に反発する分子であると書いたエマスンである。 えもいわれぬものを、ジュベールの言葉でいえば、「言語に絶するもののみの表現」をひたすら目ざし、

りもジュベールのある本質的一面をはるかによくあらわしているということはバビットも認めている。『書簡集』 家がある。しかし、バビット自身はそういう批評家にくみしない。にもかかわらず、 簡集』(Correspondence) のほうが『随想録』よりはるかに単純、 すべを心得ている人もある」とジュベールはいう。彼自身は、不幸にも、常に雲の外に出るとは限らない。 自然であるからというので、 『書簡集』は『随想録』よ 前者をえらぶ批評

の陽気さがみなぎっている。「まじめに考えなければならないごく少数のことを見分け、その他のことはすべて

にはサント゠ブーヴをしてチャールズ・ラムとの比較を思いつかせるような良質の気まぐれなユーモア、ふだんのはサント゠ブーヴをしてチャールズ・ラムとの比較を思いつかせるような良質の気まぐれなユーモア、ふだん

ルは「まったく無益な教義を抱いているまじめで、陰気くさい人たち」(この文句は多くの近代革命家を思い起 冗談半分に考えるのが英知の重要な一部分である」とジュベールには思われたのだとバビットはいう。ジュベー

こさせる) とは正反対である。ついでながら、バビット自身も「一種の dry humour の持主であった」。 ジュベールにおける超絶的気どりとでもいうべきものの危険がきわめてはっきりとあらわれているのはおそら

地球からその息を引き上げてしまえば、 それは「それが時間以前にあったもの、 一片の平たい金属、 真空の中の

アーヴィング・バビットのジュベール論

く宗教に関する随想のいくつかにおいてであろう。彼は物質の存在をただ儀礼的に認めるにすぎない。

アーヴィング・バビットのジュベール論

食おうとする。私は彼奴を上品にすることはできない。」 文字通りの意味においても、比喩的な意味においても。 り、否定したりすることはできる。しかし、この永遠の胃袋という奴は別だ。彼奴は食わないと承知しないし、 ことができるとは思われないとて、バビットはエマスンの言葉を引用する――「私はすべてのものを説き伏せた しば思い出す哲人はすでに引きあいに出したエマスンであるが、そのエマスンには物質をそう軽々しく片づける 一原子、否、それ以下のもの、たんなる無となってしまうだろう」という。ジュベールと聞いてバビットがしば

ことはないとバビットはいう。死期の迫った一八二四年三月二十二日(同年五月四日になくなった)にやっとの た。しかし、彼の霊性は真の霊性であり、ルソー流の偽物ではない。このことはいくら強調しても強調しすぎる 病弱者は実生活の乱闘を恐れ、これを避けようとする。ジュベールにもそういう傾向がいくらかあるにはあっ

ことで書いた「真なるもの、美なるもの、正しいもの、聖なるもの!」という言葉は彼の全生涯にわたる努力の

けることのできる霊魂のようなところがあるとのシャトネー夫人の言葉の正しさを否認することはできないとジ ジュベールは肉体を欠いていたと人はいいたくなる、ジュベールは偶然肉体と出会い、どうにかこうにか切り抜

ュベール自身がいっている。

ベールとコールリッジとの比較論をこころみている。バビットの念頭にはもちろんこの比較論があったろうと思 ここでバビットはジュベールとコールリッジとを比較する。アーノルドもその「ジュベール論」においてジュ

真の要約であった。

われる。アーノルドのエッセイはもと、「フランス人のコールリッジ」('a French Coleridge') と題する講義で、 ルリッジとジュベールとの類似点がコールリッジにとってむしろ好意的に指摘され、相違点をあげ

るにしても、

コールリッジはジュベールより繊細さと洞察力の点では劣っているが、豊富さと力の点では優って

諸義務からのがれ、[®] る。 こと千里、 ように、 いるという風に、概して、にわかに優劣はつけ難いという論法である。ところがバビットはそれに反発するかの ルの随想を思い出させる。 それは鍛練であり、おきてであり、束縛であり、固い約束である。」 ジュベールはコールリッジのごとき者には全然似ていないと断じる。バビットから見れば、現実生活の 万里である。 阿片とドイツ形而上学の中へ雲がくれしたコールリッジのごときはジュベールからへだたる コールリッジの思索とその日常の実践との著しいかい離はバビットの次のようなジュベ 「宗教は神学でもなければ神知学でもない。 そういうものすべてを越えたものであ

哲学教授は多いが、哲人は少い」とはソーロウのなげきである。それはさておき、サント=ブーヴがジュベールの をほめて「……(ジュベールのような)神々しい人たちの一人をひとたび知れば、純粋でなく、 ば、それも困りものだが、事務処理の能力の貧弱さが必ずしも学者のあかしとなるわけのものでもない。「当節· さは長い間、 ュベールの言葉は正当である。 さの背後には弱さがある。 ということはけっしてなかった。 病弱者のなかでももっとも虚弱な人の一人であったにもかかわらず、ジュベールは実生活の諸要求を回避するの 人びとの記憶の中にあったという。 その弱さは心の中に、 彼の郷里のモンティニャックの町の住民は彼を治安判事に選出したが、 「私の弱さの背後には強さがある。その弱さは器具の中にある。 事務処理だけが得意で好きだというへぼ学者がもしありとすれ 理性の中に、真の誠意の少なすぎることの中にある」と語るジ 繊細でなく、

モンテスキューの『法の精神』全体からよりも、

逆に、

ジュベ

りも、マキャヴールはもっとも

抜け目のない、

もっとも実際的な人の一人であった。

、ーヴィング・バビットのジュベール論

糧にするにはよすぎたということをあまりにも強くほのめかしているからである。

る」といっているが、バビットによると、このほめ方は必ずしも当を得ていない。ジュベールは人間性の日常の

間違いなく、たくさんの悩みとたくさんの不幸を準備することにな

しくないあらゆるものが永久にいやになり、

アーヴィング・バビットのジュベール論

ての手紙の中でも見られるとバビットはつたえ、フォンターヌは大学で事をなすにあたっては、 (最高の人格と知性の持主としてフォンターヌによって推薦されてジュベールはその大学の顧問をしていた) リの ベールはたんに思弁的なものを嫌悪した。彼の勇気と良識は大学教師の薄給に抗議する大学総長フォンター 『君主論』の一ページからのほうが政治技術について多くのことを学ぶことができるとまでいうほどにジ 必ずジュベー

あ

に相談し、その思想とペンは常に友人フォンターヌに奉仕していたとアーノルドは書いている。

ジュベールはたんなる現実、彼のいわゆる恐ろしい現実にたいする嫌悪を公言しているが、そういう嫌悪の生

護して「われわれが高まり、 かの観念にたいする過度の同情にある。「大げさなことばと大げさな感情」を人から非難されるコルネーユを弁 む危険は象牙の塔へのロマンティックな逃避というよりはむしろ、気品ある様式と荘重体についてのあるいくつ 地上の下劣な行為によってけがされないためには、すべてのことにおいて竹馬が必

ばならない。 要である」といっている。反対の流派の芸術にたいする彼の態度は「ル・サージュの小説は劇場を出たすぐその あと、カフェーでドミノ遊びをしながら書かれたように見える」という彼の評言にあらわれている。彼が恐ろし い現実からしりごみするのはまた、彼がフランス革命の恐怖時代を経験したという事実と結びつけて考えられね 「革命は現実の世界を私にとってあまりにも恐ろしいものにすることによって、私の精神をそこか

ジュベールは青年時代にディドロに接し、そういう接触の必然的結果として、新しい批評精神の手ほどきを受

ら追い出してしまった」と彼はいう。また、こうもいう、「革命とは、貧乏人は自分の誠実に、金持は自分の財

潔白な人は自分の生命に確信が持てないときである。」

けた。 のものに愛着したが、 しかし彼は、 たとえ革命がなかったとしても、徹底的な近代人とはならなかったであろう。 「近代人をひきつけるのは未来の魅力であって、過去のそれではない」とジュベールはい

いう。 が、そしてそれは概して正しいが、ジュベールのことは「古いものを好む人」と称すべきであろうとバビットは その点において彼は真の古代人であった。フランス人は反動思想家のことを「新しいものを嫌う人」と呼ぶ 「新刊書が非常に不都合なのは、われわれが古代人の書物を読むことをさまたげることである。」

見――各人はそれぞれの発見をもっている――は私をいろいろな偏見につれもどした」 と彼はいう。 またいう にとって直接的に理解できないものをすべてたんなる偏見としてしりぞける傾向があった。 ジュベールによると、「十八世紀は心の病気のうち、もっとも恐ろしい病気---宗教にたいする嫌悪 この世紀が欲しているのは宗教的自由ではなく、反宗教的自由である。」 この世紀は理性または感情 「私のいろいろな発

固として伝統的である。過去百年間の革命の圧迫はあまりに強かったので、もっとも見事に練られていた精神の 動思想家以上に、ジュベールは洞察力によって伝統に生命を与えはするが、それでもやはり、彼はあまりにも断 しつける態度である。そういうジュベールについてバビットは批判的にこういう、「おそらくフランスの他の反 といってきた。」 ジュベールはこれと反対の極端に傾くのであるが、 それはあまりにも専制的に過去を現在に押 「近代の改革者たちは経験に向かっては『なんじ、老いぼれ』といい、過去に向かっては『なんじは子どもだ』

秩序の利益のみを見がちである。」 ジュベールは、彼が秩序と考えるものの名において、あまりにもやすやすと 平衡をすら乱したのでる。 た。近代が獲得したもっとも重要なものと見なすものの中に、ジュベールは近代の最大の不幸を見るのである。 社会をイエズス会士たちの手にゆだね、それを聖職支配の不動の体制とでもいうべきものに固定させようと欲し エマスンは解放の利益のみを見がちであるが、まったくそれと同様に、ジュベール

りに歩む嘆かわしい時代!」と彼は叫ぶ。それは「天に通じていた、そして、すべての人がたどっていた道を人 アーヴィング・バビットのジュベール論

「おのおのの人が自分自身の分銅ですべてのものの目方をはかり、聖書にあるように、自分のランプの光をたよ

がこわしてしまい、みずからはしごとをつくらねばならない」時代である。実際、ジュベールが断言するように、 もし真実なら(ここは仮定法現在で書いてある)、手引きひもは多ければ多いほどよいとバビットはいう。 「経験にふさわしい人は少く、たいていの人は経験によって堕落せしめられるままになっている」ということが

ソーだけが諸君を宗教から引きはなすことができ、宗教だけがJ・J・ルソーから諸君を救うことができる」と ほうが油断のならない危険であるとバビットは考える。悪魔の姿をした悪魔より美女の姿をした悪魔の方がこわ 心であり、マニアである」とジュベールはいう。しかし、結局、ヴォルテールの反宗教よりルソーのえせ宗教の 的冗談を見つけるために、三、四十冊の二つ折判の書物を辛抱強く読んだであろう。それは彼の情熱であり、 少とも利益をもたらすであろうような事態はまったく考えられない。「ヴォルテールはたった一つの小さな宗教 までもない。彼によれば、改心したルソーからは利益を期待することができるが、ヴォルテールのような人が多 十八世紀の二大指導者であるヴォルテールとルソーをジュベールが一貫して手きびしく扱っていることはいう エリオットのボードレールではないが、天国へは裏口からでもはいれるというわけだろうか。「J・J・ル

事な平衡を維持している。 に想像的になろうとしていた時代との中間に位していた。彼は過去の行きすぎに対して抗議し、将来の行きすぎ ジュベールは政治と宗教において反動の側へ傾斜しすぎているが、文学に関する意見においては、概して、見 彼は理性の信用を破壊するほどに理性的であった時代と想像力の信用を破壊するほど

ジュベー

ルはいう。

にシャトーブリヤンの文学上の助言者であったが、これら二人の助言者のうち、 ものと見なすことほど、それを誤解させることはなかろうとバビットはいう。 にたいして警告する。しかし、彼の仕事を主として警告または抗議と見なすこと、彼の役割を消極的、 ジュベールはフォンター ジュベールは鼓舞し、 刺激を与 制限的な

えたが、フォンターヌにはどちらかというと警告し、抑制する傾向があった。形式主義を攻撃し、歓待の精神と 心情を持つことを訴える点においてジュベールは顔を未来に向けていた。

ず」、なかんずく、一面的であることを避けなければならない。ジュベールはいう、「人間はある程度はかり知れ ベールはとりわけ一面的な主知主義にたいして容赦しない。(この点でもまた、彼の十八世紀にたいする憎悪が ない存在であり、彼は部分的に存在するかもしれないが、その存在は完全であればあるほど楽しい。」 ヒューマ かなる人生観も健全ではない。 いる。「人を夢中にさせないものは詩ではない。抒情詩はいわば翼のある楽器である。」 想像的全体性を欠くい をそこなった。ジュベールは形式主義と合理主義との両方に反対して想像力の要求するところをたえず弁護して ニストの立場から見れば、これ以上に満足すべき発言を見いだすことは容易でなかろうとバビットはいう。ジュ 十八世紀は一つには機械的模倣を押しつけることによって、また一つには合理主義を悪用することによって詩 「われわれは何を考えるにしても、全我をもって精魂をかたむけて考えねばなら

学書の中の「一般に通用するにいたっておらず、特殊な言語を形成するのにのみふさわしいことばは信用しては 大ていの抽象的用語は空疎なものをおおいかくす影である。」「哲学は詩神を持つべきであり、たんなる推理工場 ならない」とジュベールは警告する。「深遠に見せつけようとして抽象的になる人のいかに多いことだろう! あらわれている。) 哲学者は精神的なものと抽象的なものとをごっちゃにすることによって非現実的となる。

人あての手紙によると「小石のようにかたか」った。彼がいうには、 カントを理解しようとするのは頭でだ鳥の

アーヴィング・バビットのジュベール論

人の一人であった。彼はカントをラテン語訳で読んだのであるが、それはドイツ語風のラテン語で、ボー

・モン夫

ただし、ジュベール自身は哲学の学識豊かな人であり、フランス人にしてはじめてカントを徹底的に研究した

であってはならない。」

「人は肉体のみなら

卵を割るようなもので、割ってみれば大ていの場合、何も見つからぬというのに似ている。

アーヴィング・バビットのジュペール論

神的ねんざをひきおこしたもののようである。カントについての彼の最終評価はこうである――カントは直観的 ず、精神をもねんざさせることがあり得る」とはジュベールの言葉であるが、彼はラテン語訳カントを読んで精 でなければならなかったところで知的であった、そのために、万物の真の尺度を見つけそこなった。 シャトーブリヤンによると、ジュベールはその哲学が絵であり、詩であることを願った。哲学思想が完全に円

われることになっている諸芸術間の微妙な情緒的相互作用と混交を彼は感知し、奨励した。この問題についてのの。 ならないと彼は主張する。その点.大へん近代的と思われる。のちに、ロマン主義運動において大きく立ちあら ばを十八世紀風にたんなる代数学の符号のように用いてはならない、ことばはその暗示性の雰囲気を奪われては のにあらわれるあのいくらか華麗にすぎるメタファや気どりと感じられるものの原因となったのであろう。 熟すると、 抽象性が要求されていることが明らかな場合でも、抽象的に語りたがらない。それがおそらく随想のあるも 抽象的未熟さを失い、いわば、雰囲気、かたち、音、色彩を帯びてくる、とジュベールは信じる。

しかし、ジュベールは一つの真理を述べると、必ずこれを補足する真理を述べることを忘れない。今の場合にも、

彼の多くの発言の一つを引用すると――「美しい詩句は音やかおりのように発散される。」これはヴェルレーヌの

信奉者には有難い教義と思われるはずである。進歩的な言葉をもう一つ引用すれば――「われわれは対象ではな

われわれが対象から受けた感じを描くべきである。」これは後期印象派をすら満足させるはずの発言である。

多くの近代人のように暗示性の力にうつつをぬかすということはなかった。「観念で歌い、ことばで描く」ことの近代人のように暗示性の力にうつつをぬかすということはなかった。 の色とかたちを見、その重さを感じ……」といったあと、ことばでもっとも大切なのはその色または音楽ではな について語ったあと、 「あなたがある一つのことばを十分に理解すると、それはいわば透明になり、

観念の詩でもある。」 またいう「イメージが対象をおおいかくし、あなたが影を実体とするとき、 和しているように思われるものだということを認める。彼はいう「望まれているものはイメージの詩だけでなく、 にも大きなよろこびを与えるために、あなたがその向こうへ進んでゆき、意味にまで入りこもうともはやしない つまり、詞姿があなたの全注意を吸収してしまうとき、あなたは途中で阻止され、道中を目的地と勘ちが 表現があまり

く、その意味であり、ことばは、意味をきわめて明瞭に表現するように選択、

排列されるとき、もっともよく調

下方へ下降することによって抽象性を脱しようとしたからである。そこでロマン主義運動は、概して、ジュベー 的熱狂であったからである。 ーティエには間違いなく、そしておそらくは、ユゴーにもしたたかな一撃を与えるものであるとバビットはいう。8 意見を同じくすることができなかったであろう。彼らの熱狂はジュベールのプラトン的熱狂とは異なり、 バビットの見るところによると、フランスのロマン主義者たちは、不幸にも、詩の目標についてジュベールと つまり、彼らは普通の知的水準の上方へ上昇してゆくことによってではなく、その

バソー

いしてしまう。あなたは悪しき道案内に導かれているのだから。」 これはフランスのロマン主義者の多くに、

者、 b, の熱狂とは、スタール夫人におけるように熱および動と結びつくものではなく、光および静と結びつくものであ ルの望んだ想像力の正当な復活を目ざさずして、野放図な自発性の賛美へと向かった。ジュベールの意味する真 哲人のためにとっておくのである。たとえば、ウェルギリゥスの熱狂というように。 「崇高な静寂」 と定義するのがもっとも適切であろう。そこでジュベールは熱狂ということばを大詩人、聖

じる役割についての考え方にある。 きわめて明らかにあらわれるであろう。 二つのタイプの熱狂者、すなわち、プラトニストとルソーイストとの相違はおそらく想像的幻(覚の用い方に 他のいかなる点においてよりもまさにこの点において、 ジュベールのもっとも独創的な点は実生活および芸術において幻覚の演 自分は ープラトンよ

分である。したがってわれわれはいかなるものをもむき出しの状態において見ようとしてはならないのである。 それは欺まんによってではなく、幻覚によってである。」 このように考えられた幻覚は実在の必要不可欠な一部 れわれを終始だまし、また、 ていることがこの真理の優雅さである。この幻覚と英知との結婚が人生の、また、芸術の魅力である。 真理をわれわれは幻覚のヴェールを通してのみ知覚することができるのであり、このようにヴェールにおおわれ あることを神は見そなわし、彼をあわれみ、これらの真理を想像する能力を彼に与えたもうた。」 この意味での ができるのである。 幻覚によって感覚の実在と精神の実在とは通じあうのである。 難を甘受しなければならないであろう。芸術家は高次元の実在をほうふつさせるように対象を用いなければなら りもブラトン的」であるとの彼の自負が正当化されるのである。彼はプラトンに反対しながらも、 ない。そしてこの高次元の実在をほうふつさせることは想像的幻覚の助けをかりてはじめて達成できる。 めてプラトン的な議論によって芸術を擁護する。芸術家は感覚の対象を描写することに満足していてはならない。 作品は実在から二段階遠ざかり、「影の世界の影」にすぎないものになるとのプラトンの非 「人間が生まれつき知ることができないが、それでも、知れば彼の利益となる多くの真理が われわれがだまされることを望んでおられる。神がわれわれをだますというとき、 われわれは肉体を媒介として霊魂を想像すること それ自体きわ 一神はわ

いずれの場合も、ゆきつくところは人間嫌いであった。まさに両極端は相通ずる、である。 ジュベールは想像的幻覚の正しい用い方についてのみならず、 ルソーイストたちによるその悪用、

とするスウィフトの態度と、実在(少くともジュベールの意味する)を捨て、幻覚を取ろうとするルソーの態度。

人間性からすべてのヴェールをはぎとり、幻覚を抱くことなしにこれを眺めよう

明らかに二つの極端がある。

廃の誤まれる幻覚とでも呼び得るものについてきわめて洞察的な意見を述べている。 ルソーは幻覚を精神の実在

魏は自制によって強く、魏は感覚を支配する力によって王者であり、その光と平和によって美しい。」 彼による 魅力でおおうためにこれを用いた、とジュベールはいう。この支配的衝動にたいする態度においてジュベールは と結びつけなかったが、感覚の実在といくらか結びつけ、俗世的衝動、特に、支配的衝動である性衝動を一種の ルソーとたもとを分かつのみならず、フランス人の中でもっともフランス的でない人の一人である。 「貞潔によって魂はもっとも腐敗した場所においてさえ清純な空気を吐き出す。 普通の美徳にとっては理性で十分かもしれないが、われわれを貞潔にすることのできるのは宗教だけである。 肉体の状態がどうであろうと、 彼はいう、

人がいたるところで見いだす不協和音を好ませる。たしかに、 おいてより彼の作品においてのほうが色濃いことを見てうっとりする。彼の諧調音は、 ダン・ド・サンピエールの文体は目を疲れさせるプリズムである。 を投げかけた。 いてジュベールはこういう――彼はルソー流に情熱を賛美したのみならず、自然全体の上にえせ理想主義的魅力 あの感傷的な理神論者であり、 その結果は 「恍惚としたエピクロス主義、 ルソーの門弟である人とバビットのいうベルナルダン・ド・サンピエールにつ® 荘重にアナクレオン風の道徳」。 自然の中には音楽がある。 彼を長時間読むと、 人は草木の緑はいなかに 彼が世界から追放したが、 しかし、 またいう、「ベルナル さいわいにも、

ソー主義にジュベールがどう対処するか、 投影した情緒的自我に陶酔するなどとということはバビットにとっても我慢のならないことである。 すでに述べたように、 ジュベールはシャトーブリヤンの文学上の助言者であった。そのシャトーブリヤンの これは微妙な問題である。 「友人が片目のときには、 私は横顔の方か

それはまれである。もし現実がこれらのお方が至るところに聞きとるメロディを提供するものなら、

気が遠くなって死ぬことだろう。」

感情を抑制することなく吐露したり、

自然の中に

したけだるさの中に生き、

ら彼を見る」というジュベールである。 しかし、 彼にあっては、 批評はその権利を友人にたいする場合にも失う

アーヴィング・バビットのジュペール論

情を持っているように見えることになんとか成功している。ここにも、 い魂」はバビットの大嫌いなものである。ジュベールはそういう意味での「美しい魂」では全然なかった。 わめてきびしくて選択的」であるジュベールが見られよう。軟弱そのものの、ロマンティックな意味での「美し したしゅん厳な批評のいくつかを先まわりしていっている。 の傑作であるとバビットはいう。その手紙の中で、ジュベールはサント=ブーヴがシャトーブリヤンについて下 ことはなかった。彼がモレにあてて書いたシャトーブリヤンの性格に関する手紙はシャトーブリヤンの心理分析の しかし、同時に、好意的であるのみならず、深い愛 「完全に温情的でやさしく、同時に、

が」と答えた。そして「趣味は魂の文学的良心である」と付け加える。バビットによると、趣味は、大ていの望 もある。文学には多大の情熱が必要であるといわれて、ジュベールは「そうです、非常に多くの抑制された情熱 れねばならず、生の衝動は生の抑制に従わなければならないということである。これはバビットの持論の一つで 同情は選択と理想的に結合していなければならない。ということは、実践的には、膨脹は集中によって調節さ

愛好する絵は少く、愛好するオペラは少く、愛好する彫像は少く、愛好する詩は少い。しかし、私は芸術の大愛 われはほとんどいかなるものをも容認するよう求められる。そういう求めにたいしてジュベールはいう、「私の しなければわれわれが偏狭であり、非同情的であることを示すことになるだろうからという理由で、今日、

ものと考える傾きがあった。ジュベールはどちらかというと集中という極端に傾く。彼は書いている―― とに頑強に無視し、否定してきた面でもある。 味の選択的、制限的面はそれ自体もっとも重要であるのみならず、ルソーからクローチェにいたる近代人がまこ ましいものと同じく、性質が二元的であり、極端と極端との間を調停したものである。ジュベールの重視する趣 スタール夫人は天才と趣味とを同一視し、 両者をともに膨脹的な

である。」 ところが、われわれが見なれているものはおそらくこれと正反対のもの、つまり、生得の才能は貧弱 に苦しめられた人があるとすれば、それは私である。」「古代の批評家たちは過少より過多が悪いといった。われの な本を尊ぶが、読者は小さな本を好む。小さい本はその生命がより長い。」 ものを熱愛する近代人の癖をまったく持っていない。「たえなるもののほうが大きなものよりよい。 なくせに、少くともジャーナリストの不毛の健筆を習得するのに成功した人たちであろう。ジュベールは大きな に文学はない」と彼はいう。また、こうもいう、「立派に物を書くためには、生得の健筆と苦吟の習慣とが必要 に結びついているもう一つの自然主義的悪徳―――たんなる力またはエネルギーの賛美(サント゠ブーヴがバルザ われはこの言葉をほとんど逆転し、あらゆる種類の豊富さを称賛する」とジュベールはいう。 の書物全体を一ページの中に、一ページ全体を一句の中に、この句を一語の中におさめるというのろわれた野心 ックにありと非難した文学におけるナポレオン主義)をジュベールは繰り返し攻撃する。 「繊細さのないところ 豊富礼さんと密接

や金の延べ棒を識別し、 ジュベールは彼のいう試金石を持っていたが、彼とて判断を誤ることはあった。誤ることがまったくないとい ジュベールは高度に批判的であり、選択的であったが、彼の判断と選択の基準は形式的ではなく、直観的であ 形式主義者たちにたいする軽べつを表明して彼はいう、「職業批評家たちはまだ磨いてないダイヤモンド 彼らの批評ははかりや物差しは持っているが、るつぼや試金石を持っていない。」 評価することができない。彼らは商人であって、文学において知っているのは通貨だけ

もあり得た。このことは彼がモレあてに書いた手紙の中でこころみたミルトンとドリル神父との比較論を読めば うことは人間にはとても許されない特権であろう。To err is human. であり、Even Homer sometimes nods 彼はホームグラウンドともいうべき詩においてすら、形式主義にたいする用心が十分でないということ

そらく、彼がその適切な定義をはじめて下した人の一人であった時代精神の力の強さを物語る一例であろう。 だ (not only bad but almost monumental in its badness) とバビットはいう。この場合のジュベールの不明はお この比較論は誤っているというもおろか、その誤り方たるや、途方もないと形容してもよいほどのもの

摘したように、知性はその下方にあるものについても、その上方にあるものについても、これを知ろうとすれば、 直観に依存しなければならぬことは明らかである。そこで、すでに定義した二つのタイプの熱狂に密接に対応す ビットがいうように、この際、直観ということばを慎重に定義する必要があろう。その昔、アリストテレスが指 実際、彼を形式主義者と対照的に区別して直観的批評家と定義することは多分きわめて適切であろう。ただ、バ る二つのタイプの直観を区別することができよう。一は感性的または審美的直観、他は知性的または精神的直観。 にもかかわらず、ジュベールの批評的直観は、概して、彼をして時代精神にたいしてすら警戒させるのである。

のか、また、 て感じられるものである。たとえば、エマスンのような人の持つ直観について語ることもできれば、直観という メートルはジュベールのことを「風変りで楽しい人」といっているそうである。ジュベールがなぜ「風変り」な ことばをチャールズ・ラムのような人の持つ審美的感受性、鋭敏な文学的知覚力に適用することもできよう。 なぜ「楽しい」のか、その理由をルメートルは特に明らかにしてはいないが、バビットの解釈によ

「多」の直観と「一」の直観と名づけてもよいであろう。前者は「生の衝動」として、後者は「生の抑制」とし

の本能、 審美的直観を持っているということである。 ると、それは、ジュベールが今しがた定義した二つのタイプの直観を兼ねそなえていたということであろう。 「風変り」というのは知性的、精神的直観を持っているということであり、「楽しい」というのは感性的、 敏速な識別力、要するに、精神的なすべてのものを発見するための生来の鋭敏さ」をそなえていた。ま エマスンと同じく、ジュベールは「天賦の観察力、 精神の目、

た一方、ラムは、ハズリットによると、食通がオリーヴを味わうように昔の作家を味わったということであるが、 ジュベールもまたそうであった。

それ自身の理性をもっている」とパスカルがいうとき、彼が心といっているのは明らかに超感覚的、すなわち、 うことばは、明らかに、直観ということばと同じあいまいさをまぬがれない。たとえば、「心は理性の知らない 識してきた。それは「頭」と「心」との対比として世界の文学にゆきわたっているものである。しかし、心とい るようなことはジュベールはけっしてしなかった。人間の理性的面と直観的面との対比を人間はこれまで常に意 なおその上、たんなる審美家がえてしてしがちであるように、異なる種類の直観に対応する存在の面を混同す

両者は心ということばによって違うものを意味している。つまり、違う種類の直観をさしていうのにこのことば う欲望と衝動のことである。ルソーにおいても、パスカルにおいても、すべては「心」にかかっている。しかし、 精神的直観のことである。これに反し、ラ・ロシュフーコーが「頭は常に心にだまされやすいものである」とい うとき、彼が心といっているのは明らかに人間性の下理性的領域からもうもうと立ち昇って理性のまわりをおお

ジェームズ、ベルグソン、クローチェなど、世人の注意を集めている思想家がすべて、少くとも知性から直観

を用いているのである。そういうことが両者を比較すれば明らかになる。

プラトン的直観を持っているからである。ジュベールと違い、ジュームズやベルグソンは「一」を生きた直観と はこれらの思想家と共通点を持たない。彼らがルソー的直観しか持っていないのに、ジュベールはそれに加えて して見ないで、生気のない知的概念と見なしている。そして彼らは流転の中にもぐりこむことによって、言いが に訴えるという点において一致している今日、右のような区別は特に必要であるとバビットはいう。 「多」の直観を涵養することによって、この主知主義から脱却できるとわれわれに信じこませようとす

まったく転倒した実在観を抱いていたことになるであろうから。 そうしてこの見地からしてベルグソンを特に不信の目で見たであろうと思われる。もしも実在についてのベルグ われる。 る。 ソンの観念が正しければ、プラトンとアリストテレスにはじまる過去の哲学の大部分は誤っているのみならず、 の哲人がひどく嫌ったであろうようにひどく嫌う」――をこの現代哲学について語ったであろうと遺憾ながら思 過去の哲学に光を投ずるどころか、ただそれに反対するにすぎない哲学をジュベールは不信の目で見た。 ールは、 彼がその時代の変化の哲学について語ったこと――「私はこれらの恐ろしい格率をいにしえ

することのできるもう一人の人が生まれる」とジュベールはいう。「聞く耳は常に話す舌の近くに見いだされる」 財産に意を用い、味方と敵を、快楽と苦痛を持ち、生まれ、育ち、生きそして死ぬことだろう---易であろう。「一国民の中に偉大な思想を産み出すことのできる一人の人が生まれると、その思想を理解し、称賛 とはエマスンの気に入りの説である。 れとわかるのである。 たとえば、ジュペールとエマスンとから類似の文句を集め、そのリストをつくることは容 「いかに多くの人が食い、飲み、結婚し、売り、買い、建て、契約を結び、 -眠ったままで。」

ちは本質的なものについて意見が一致している。このことによって、無限に多様な時空の偶然を貫いて彼らはそ

ジュベールが精神的直観の持主であるということは彼を哲人の仲間に入れることである。この仲間の代表者た

間は「一」の直観に比例して一つとなる傾向がある。 察の中に見いだされる。 ジュベールや哲人たちの直観とベルグソンの直観とは時間についてのそれぞれの見解をならべてみると非常に われわれは上昇して出会う。 言いかえると、人類の真の統一原理は人類の哲人たちの洞 このジュベールの随想に匹敵する文句はエマスンに見いだすことができるかもしれない。が、これは仏教的とい

とりわけ、仏陀とは「目ざめたる人」の意であることを思い出すならば。

われわれ人

ってさしつかえなかろう。

続もなく、新しいもなければ古いもなく、昨日もなければ明日もない。」 エマスンは「神の深淵の核心部」につ 連続によってはかられるが、そういう時間は見られ、感じられ、数えられ、そして存在する。天上には変化も連 化は時間の中で生じる。そこで「時間はまことにわれわれの生をつくる材料である。」 われわれは「永遠の相 はっきりと対比されるであろう。ベルグソンにしたがえば、実在は流転と変化の純粋なプロセスであり、この変 このようにベルグソンとは違って、時間の中にではなく、 1 を引用している。仏陀いわく「賢者は時間から解放されている。」 ミケランジェロいわく「時間の流れぬ魂は な形式で、また、 ていくらか似た仕方で断言する――「そこでは過去、 .わいなるかな!」ジュベールいわく「時間は、この下界では、たえず変化し、たえず新たにされている存在 実にさまざまな時空の条件の下で見いだされるであろうといって、バビットはいくつかの言葉 「持続の相の下に」事物を見ようと努力しなければならない。これと正反対の主張がさまざま 現在、 時間を超越することによって最高の実在を見つけた人 未来は一つの根から咲き出る三つの花である。」

方に柔軟性があったということである。 個人的なもの、 事実、もっとも賢明な人とはおそらくこれら二種類の直観を兼ねそなえ、 は、ベルグソンの推奨する意味での直観を持つことが大いに望ましく、また実際、そうであることが必要である。 精神的直観を所有してはじめて哲人たりうるとすれば、芸術や文学を批評し、または創作する人となるために ジュベールの批評家としての資質を特に示すものは彼が基準を持っていたばかりでなく、 一時的なものについての鋭敏な知覚を単一性 (unity) についての感覚に接合させる人のことであ 不定なものについての感覚によって適度に調節されている。 彼は一定不変のもの、 永遠的なものを強調するが、その強調はほとんど 両者の間を調停する人、地方的なもの、 「人はいかりとバラストを、 その基準の持ち

のリストを無限に長くすることができるであろう。

定まっている書物で、その名声を再びかちとらねばならぬとすれば、そうすることのできない書物のいかに多い 文体を、一の知性より他の知性をえらぶ。」 ジュベールはアナトール・フランスを先まわりするようないいまわ 場合、よい趣味そのものがあなたが最上の趣味からさえ離れることを許す。なぜなら、趣味は――よい趣味でも や時代の風習と関連があればあるほど、あなたの文体は、その時代の風習または個人の性格を作品の中で表現す たいう、「文体の真実は不可欠の美点であり、作家を推薦するのに十分である。もしあらゆる種類の問題について すなわち、 も季節に応じ、時には、同じ一日の中でも時刻に応じてわれわれは一の書物より他の書物を、一の文体より他 次に栄冠をかちとったにすぎない。いや、それどころではない。同じ一生の中でも年齢に応じ、同じ一年の中で ヌ、ウェルギリゥスとルーカヌス、セネカとキケロ、タキツスとリヴィ、アリストテレスとプラトン、彼らは順 さまざまな世紀の趣味に依存している。 つ書いたであろうようにいつも書き、かつ、考えるのが賢明であろうと私は思う。」 またいう、 においておそらく保守主義者の特徴があらわれるのであろう。)「宗教について演説する人はボシュエが考え、 るのにすぐれていたというだけの理由でこれまで手本となってきた作家の文体から離れなければならない。この われわれはもはや同じ気質、同じ意見、同じ風習を持たないのだから……あなたの書くジャンルがあなたの性格 ルイ十四世時代の人たちが書いたであろうように今日書こうと欲すれば、 ふくらむままにさせておくべきである。マストだけはゆるがぬようにしておかなければならぬ」と彼はいう。 ――風習とともに変化するのだから。」 しかし変化しないジャンルもあるとジュベールは付け加える。 「文学には、そうして、作家についての定まった評価には真実よりも因襲的意見の方が多い。 一定不変の意見をそなえなければならない。 古来のものすら流行の変化の影響をまぬがれない。 しかしながら、吹流しは自由にひるがえるままに、 われわれの文体に真実はないであろう。 コルネーユとラシー 「書物の流行は (この点

ことだろう!」

す人たちである。まこと、ジュベールのいうように「天国は天国を思う人のために在る。」 きする可能性のある作家はジュベールのように人間の中にあるこの永続的なあるものを真に知覚し、それを目ざ 不変の規則があり、常に人をよろこばせる美もあれば、一時的なよろこびしか与えない表現様式もある。」 永続 人間精神の本質に適合させるほうが百倍もよい。人間にはなにか不変のものがある。だから芸術や芸術作品には ようとする立場においそれと同調するものではない。彼はいう、 このようにジュベールは相対性の要素を大幅に認めるにやぶさかではないが、文学にただ社会の表現のみを見 「作品はいわゆる社会の状態に適合させるより

値するいくつかの発言は一個の偉大な精神を有名にするのに十分である。 を去ってしまったが、(といっても、弱い、弱いといいながら、七十歳まで存命した) 彼がいうように「記憶 ことならば、病弱すら怠惰の言い訳にはならぬ。閑話休題。記念碑的な仕事を残すことなくジュベールはこの世 ない。ましてや、ジュベールのこの言葉を口実に在職中の怠惰を正当化しようなどとするのは論外である。その 言やよし。しかし、人はいつまでも生きていられるものでもなければ、いつまでも気力、体力がつづくものでも 想に「教授たる者の著書は永い経験の果実であり、退職してからの仕事でなければならない」というのがある。 つかったことをついに確かめたとき、すでに死が近づいていた。バビットは引用していないが、ジュベールの随 はみずから記念碑をくわだて、その中に入れるべき材料を確かめるのにあまり多くの時間を費し、望むものが見 いるのみならず、彼自身の言葉でいえば、その観念を住まわせる家を持った人たちの下でなければならない。 ジュベールの地位は、もちろん、真に創造的な人たち、決定的な記念碑的作品を残した人たち、観念を持って 一巻の書物全体の精髄を含んでいるよ

彼の名声はこの種の随想や発言にかかっていて安泰である。ジュベールが定義しようとした

うな随想がある。」

彼を忘れるわけにはゆくまい、とバビットはそのジュベール論を結んでいる。 ような直観の才能が批評家の間において、将来、過去においてよりももっと一般的になるのでなければ、 世間は

注

- Company 1963, 'Introduction,' vii) Milton Hindus や同意見である。(The Masters of Modern French Criticism by Irving Babbitt Farrar, Straus and
- T.S. Eliot: Essays Kenkyusha, p. 38. (one of the most learned of our time)
- 3 拙稿「アーヴィング・バビットと大学教育」(「英文学評論」 京都大学教養部英語教室、五集、三一ページ) 参照。
- pp. 235-8)。 一八一七年はスタール夫人の死んだ年。 一八一七年七月二十一日付のヴァンティミル夫人あての手紙(Correspondence de J. Joubert, Paris, 1914, LXXXV,
- The Masters of Modern French Criticism Farrar, Straus and Company 1963, p. 378
- 1962, p. 184 The Complete Prose Works of Matthew Arnold, III Lectures and Essays in Criticism The University of Michigan
- © Ibid., p. 184.
- ⑨ 山本信、アリストテレス全集、岩波書店、十三巻、月報。
- T.S. Eliot, op. cit., p. 20. これはエリオットがJ・M・マリの「内なる声」が語るとしたことの一部
- 関心がジュベールに集まり、シャトーブリヤンの編さんした本が増補され公刊されるにいたった。サント』ブーヴはまた 世界評論」に書いた。 これが Portraits littéraires, II, pp. 306-26 におさめられている。 この批評によって世人の深い 友人たちだけがまわし読むためにつくられたものであるが、サント=ブーヴがその批評を一八三八年十二月一日号の「両 一八三八年(ジュベールの死後十四年)、シャトーブリヤンがジュベールの断片的な遺稿をまとめて一本とした。これは

Causeries du lundi, I(一八四九年十二月十日) においてジュベール について書き、さらに、Chateaubriand et son

groupe littéraire sous l'Empire のほとんど各ページにジュベールがあらわれる。 6にあげた書物の注による。) (アーノルドのジュベール論および注

- Essays in Criticism, First Series におさめられているアーノルドのジュベール論をバビット(op. cit., p. 35)
- ベール論を熟知しているものとの前提に立ち、アーノルドの引用したのと同じ「随想」を翻訳することは避けるといって 号)もこの評論を「われわれがこれまでに見たジュベール論中、断然もっともすぐれたもの」と評価している。起承転結 of the best critical essays ever written in English、と激賞している。「スペクテーター」誌(一八六四年一月三十日 よろしきを得、まことに整然とした好論文であると筆者も思う。バビットはそのジュベール論の読者がアーノルドのジュ
- たが、バビットのこの説の当否をきめる客観的資料を見つけることはできなかった。ただ、バビットがジュベールを理想 的批評家と考えていることは、本稿を最後まで読んでいただけばわかると思う。 批評史において実際にジュベールはこのような高い地位を占めているのであろうか。そう疑って、いろいろと調べてみ

いる。筆者も本稿を草するにあたって、すでに注6、7、10において示しているように、アーノルドのジュベール論を随

- クなものをあるより大きな全体に従えることによって生じる構造的性質を文体が持つべきであることが説かれている。 は価値ある大ていの他のものと同じく、困難な調停の結果である」といっている。そこでは、各個人のもっているユニー Character and Other Essays におさめられている)の冒頭で、バビットは「私がこれから用いようとする意味での文体 は大ていの望ましいものの性質は二元的であるから。The Problem of Style in a Democracy(1932) という講演(Spanish ルの文体観はバビットにとってはわが意を得たりと思われるものではなかろうか。のちにも触れるが、バビットにとって 文体の「華麗」と「簡潔」は正反対の性質である。その両性質を統一したところに最高の文体美があるとするジュベー
- system, and, as far as regards composition, with the most fragmentary result; paragraphs incompressible, each University Press, 1965, p. 185) の中に次のように書かれている——Here I sit and read and write with very little アーヴィング・バビットのジュベール論

一八三八年五月十日付、コンコード発、カーライルあての手紙 (The Correspondence of Emerson and Carlyle Columbia

sentence an infinitely repellent particle (my italics).

- ジュベールのこの随想をバビットは文体の問題として引用しているが、ジュベールは宗教の問題についていっているの
- (9) Causeries du lundi, I, p. 173. (Enfin, pour tout dire, il (i. e. Joubert) a de la singularité et de l'humeur individuelle dans ses jugements. C'est un humoriste indulgent, qui rappelle quelquefois Sterne, ou plutôt Charles
- Lamb.)

昭和十四年、四七七ページ。 なお、 Milton Hindus (op. cit., xiv) もバビットの

Representative Men Kenkyusha, p. 113. モンテーニュ論中の言葉:

'dry humor' に言及している'

石田憲次『信仰告白』、研究社、

- ship Houghton Mifflin Company, 1962, p. 22) とは思われない。 ととなった。」なお、このあたりのコールリッジ観はバビットのいわゆる 'rounded estimate'(Democracy and Leader-「コールリッジにとってと同じように、ルソーにとっては、いかなるものも、それが義務としてあらわれると、不可能なこ バビットは Literature and The American College Houghton Mifflin Company, 1908, p. 50 でもこう書いている——
- 困ばいして、話すことも、動くこともまったくできないという状態が数日間つづくことがしばしばあった。 アーノルドによると、ジュベールは胃と胸との病気にたえず苦しめられ、思索、読書、座談に度をすごしたあとは疲労
- 選んだ。この任命はジュベールの望みにも、好みにも合わなかったが、彼は、この際、辞退すべきではないと考えた。彼 銘を受け、それを忘れずにいたので、彼が町を出てから何年も経っていたのに、彼の何も知らぬうちに、彼を治安判事に 家にあって猛勉強をした)、きびしい態度の人であり、 まさにプルタークの有徳の士のような人物であった――に深い感 にわたって公選制にした。モンティニャックの住民たちは若い町民ジュベール(当時、三十六歳)の人となり――彼らと 一しょに住んでいたころの彼は素ぼくで学問好きで(二十二歳のとき、病弱のため教職を退き、それから二年間、郷里の この間の事情をアーノルドにしたがって少し詳しく述べると──一七九○年、国民議会は治安判事の職をフランス全土

- は任期二年をき然とした態度と誠実さ(それはそののち長い間、人びとにより記憶されていた)をもって勤め上げた。 の人びとは彼を再選したが、彼らにたいする義務はもう果したと考え、彼は自分の好む隠退の生活にもどった。 町
- professors of philosophy, but not philosophers.) Walden and Other Writings of Henry David Thoreau The Modern Library, 1937, p. 13. (There are nowadays
- Democracy and Leadership, p. 63 ではむしろ、モンテスキューの非実際性を示すためにジュベールが引き合いに出され ここではジュペールが非実際的でないことを示すためにマキャヴェリとモンテスキューが引き合いに出されているが、
- ジからのほうが政治技術について多くを学び得るであろうといった。」 いる。あまり非実際的なので、かの天使のようなジュベールさえ、モンテスキューの一巻からよりマキャヴェリの一ペー ている。「マキャヴェリの政治についての見解にくらべると、モンテスキューのそれには非実際性の雰囲気がただよって
- ❷ 一八一一年十月二十八日付の手紙 (Correspondence, pp. 217-219)。
- ∞ こことは直接の関係はないが、バビット(Democracy and Leadership, p. 41) はラ・ロシュフーコーについてこう書い とを主張することによってマキャヴェリの伝統に属するのであるが、そうなったについては、彼がフロンド党の反乱に加 ている――「ラ・ロシュフーコーはまた人間のもっとも美しい美徳と思われるものの中にさえ、利己主義的要素のあるこ
- 担したことが大きな原因になったといわれている。」
- 昭和十九年、四十四ページ参照 ある。なお、ついでながら、バークが偏見の功徳を賛美したことについては、石田憲次『近代英国の諸断面』、星野書店 traditional forms that are in no small measure the funded experience of any particular community 8000 racy and Leadership. p. 99) 以よのい、practically everything that is traditional and prescriptive ぐあり、the ジュベールのいう「偏見」とは少しちがうが、バークもまた「偏見」を弁護した。その「偏見」とは、バビット(Democ-
- 28) バビット(Democracy and Leadership, p. 282)はこんなことをいっている——The devil, as is well known, is a com-

materialism is in short less to be feared than sham spirituality. paratively harmless person unless he is allowed to disguise himself as an angel of light. An unvarnished

- Christianity. Satanism itself, so far as not merely an affectation, was an attempt to get into Christianity by its less creditable paraphernalia, it amounts to a dim intuition of a part but a very important part, of T.S. Eliot: Selected Essays Faber and Faber, 1972, p. 421. (When Baudelaire's Satanism is dissociated from
- ☞ バビットはここでこの夫人の名をさりげなく出すにすぎないのであるが、アーノルド(op. cit., p. 186)は彼女を「文 xvii)はいう、「こういうロマンティックな誇張はバビットの柄にまったく合わぬことである。彼はおよそ想像的魔力と 学史に一種の芳香を残し、知り合いでなかったことはえもいわれぬほど残念なことだという気持を代々の読者に起こさせ いうもののとりこにやすやすとなりはしない……彼がサント=ブーヴまたはアーノルドがしたように、ボーモン夫人につ るような女性の一人」と称揚している。 もっともこの称揚はサント=ブーヴ (Causeries du lundi, I, pp. 164 ff.) の彼 the back door.) いて書くなどということは想像もできない。彼は彼女のパーソナリティにはあまり関心をもたなかった。彼が彼女に関心 女にたいする熱烈な称賛にいくらか負うているとのことである。(Arnold, op. cit., p. 454) Milton Hindus (op. cit.,
- をあげようとするくわだてを糾問している。 バビットは The New Laokoon において、ロマン派によるジャンルの混交、特に言語によって音楽および絵画の効果

をもつためには、彼女はスタール夫人のように思想をもった女性でなければならなかった。」

- した利益を精神に与える。」(大塚幸男訳、ジュベール『随想録』、世界人生論全集9、筑摩書房、三四三ページ。) ジュベールには次のような随想がある。「わたくしは同時に二つの真理を見ることを好む。なべてよい比較対照はそう
- れわれは芸術から治療学にいたるまで暗示性のもっている力にうつつをぬかしている時代に住んでいる」といっている。 バビット (The New Laokoon Houghton Mifflin Company, 1910, p. 184) は「芸術における暗示性」を論じて、「わ

バビット(iòid., p. 150) はゴーティエについてこういっている——「ゴーティエの詩は純粋に絵画的といってもよいほ

どである。おそらく他のいかなる芸術家にもまして、彼は意図的に芸術の置き換えをなしとげよう、ことばを画家のパレ れをかける釘だけが必要であるという。彼の詩は知的無内容と同じくらいに、その視覚的暗示性のゆえに非凡である。」 ットと張り合わせようとこころみた。彼はその短詩の一つについて、それを一幅の完全な絵とするためには、額ぶちとそ

それがそそがれている外的対象または出来事との途方もない不均衡――がユゴーにはたくさん見られる。」 バビット (ibid., p. 246) はこんなことをいっている——「ロマンティックな、内容のうつろな大げさな表現—

(Rousseau and Romanticism Houghton Mifflin Company, 1965, p. 257.) 「崇高な静寂」と定義されてきたタイプの熱狂はきわめてまれであるが、現実には存在する、とバビットはいっている。

う媒介を通してはじめてたがいに結びつくことができるという。また、人間の低劣な性質と高尚な性質とを調停するにあ るもっとも美しい陳述であろう……。」 秘的幻想のヴェールを投げかけることが想像力の役割であると考える。それはおそらく最高の芸術の目標についてなし得 あって真正のプラトニストであった。ジュベールは……その魔力、魅力を理性に貸し、ある本質的な真理の上にいわば神 …ときどき、過度に微妙となり、あまりに霊妙希薄となる傾向がありはするが、えせプラトニズムが横行していた時代に たって想像的幻覚の演じる役割についてかつていわれたもっとも洞察的なことのいくつかを語っている。ジュベールは… バビットは The New Laokoom, p. 100 においてこんなことをいっている——「ジュベールは、精神と物質は幻覚とい

響力を洞察しようとする者にとっては、この簡単な一文ほどよい指針となるものはありえない。」 あるというのは、真実であると同じくらい微妙なジュベールの言葉である……そうして詩の人間の心にたいする秘密の影 Phaeton Press, 1967, I, pp. 122-146) というエッセイの冒頭でこう書いている。「芸術の精髄は幻覚と英知との結合に また、ネオ・ヒューマニスツの一人であるP・E・モアはその"Arthur Symons: Two Illusions" (Shelburne Essays

- Rousseau and Romanticism, p. 122
- パ スカル全集、人文書院、三巻、五十八ページ。) パスカルには次のようなパンセがある。「あまりに多くの協和音は音楽では不快をもよほさせる。」(『パンセ』七二、

アーヴィング・バビットのジュベール論

てよろこぶ。いまだかつてだまされたことがないような人は友ではない。」「友情の持つ弱さを持たない人は友情の持つ力 ジュベールには友情について次のような随想がある。「友人たちの欠点を意地の悪い目でうかがう人は、欠点を見つけ

40

を持たない。」(大塚訳、前掲書、三五三ページ。)

- (フランス王 1840—48)の下で内閣を主宰することになっていた。(Matthew Arnold, op. cit., p. 455.) 一八○三年十月二十一日付(Correspondence, pp. 106-114)。モレは一八三七年四月十五日から二年間、Louis-Philippe
- 訓練された、選択的同情であるということを知っていたことは疑いない。選択をともなわない同情は軟弱となり、非同情 すべきヒューマニストにふさわしく、キケロは、望ましいものは同情だけではなく、また、訓練および選択だけではなく、 - バビットは随所において同情と選択とが結びついていなければならぬことを説いているが、一例をあげると――「称賛

ヴィジョンは集中の一プロセスである。 つまり、 日常的自我の膨脹的欲望に抑制を加えた結果である。」(Rousseau and 的選択は軽べつ的になる傾向がある。」(Literature and The American College, pp. 7-8.) 「膨脹と集中」についても同様、 バビットは随所で述べてい るが、 次の一文を引用して参考に供する。 「真の宗教的

- Romanticism, p. 183.) 完全の理想的基準をかかげ、 それを静観することにあまり多くの時間を費すことはあやまりであるとアーノルド
- 44) cit., pp. 196-7) はいい、そのことはジュベールも知っていたとて、その一例としてこの随想を引用している。 一八〇五年三月十八日付の手紙(Correspondence, pp.141-4. 問題の比較論は一四二ページ)。アーノルドが英訳してい 大塚訳(前掲書、四〇二ページ)を借用。
- 読むことができなかったからといってあなたが憤慨されるのはなぜか、私は知りたいと思います。ミルトンが詩を書いて いる言語(英語)を私は理解しないし、また、理解できるようになりたいともあまり思いません。もし、ラシーヌの次男 とができ、それにもかかわらず、私が多くの欠点を見いださざるをえないあなたのミルトンについていえば、私がついに るものを和訳すると次のようになる。「ドリル神父の手柄により(ドリル神父は『失楽園』を仏訳した)私が称賛するこ

の散文訳によってでもミルトンが我慢できないような詩人だとすれば、それは私がわるいのでしょうか。あなたのおっし

- 英語を読まなかったことを付け加えるのがまったく公平であるとバビットはいう。 ゃる力ということが力強くあらわれる美のことであるなら、ドリル神父の方がミルトンより多くの力を持っていると私は 主張します……。」(Op. cit. p. 192) これは私的な手紙の中での短気の激発であるとアーノルドはいい、ジュベールは
- saugrenu judgment? といっている。jugements saugrenus(突飛な判断)というのはシャルル・ド・レミュザがドイツ とイギリスは Genius を、フランスは Cleverness をもっているというコールリッジの議論を評したことばである。 アーノルド (oþ. cit., p. 192) はこの比較論に言及して…is it possible to imagine a more perfect specimen of a
- ☞ ジュベールは時代精神を次のように定義している──

(Arnold, op. cit., p. 454.)

- et sur la vérité même de la plupart des opinions dominantes. du temps, sorte d'atmosphere qui passera, mais qui, pendant sa durée, trompe tout le monde sur l'importance Il y a dans chaque siècle, même dans les siècles les plus éclairés, ce qu'on peut, à juste titre, appeler l'esprit
- 徳的感覚とは今われわれが用いていることばでいえば、「一」の直観、精神的直観であり、審美的感覚は「多」の直観。 リに欠けているものは「道徳的感覚と審美的感覚とを結びつけることのできる哲学」であるといっている。ここでいう道 P・E・モア (Shelburne Essays, VII, pp. 233-4) はあるべき批評の姿を考察している中で、アーノルドとシャフツベ

審美的直観であろう。

p. 314) そうしてこの本の編者 William Carew Hazlitt は、ハズリットがこういう批評家のことを書いているとき、 が書いてあり、そういう批評家たちは 'eaters of olives' だとある。(Table Talk, London George Bell & Sons, 1902, 出典未詳。ただ、ハズリットの「批評論」というエッセイの中に、Occult School とでも名づくべき批評家たちのこと

その頭にあったのはチャールズ・ラムだったのだと注している。(同書、三一三ページ。)

『パンセ』二七七(前掲書、一八〇ページ)。

アーヴィング・バビットのジュベール論

(51) ここでバビットはジェームズを批判しているのだが、Robert Sencourt (T.S. Eliot: A Memoir Dell Publishing Com-

pany, 1971, p. 35) は両者を次のように比較している——His (i. e. Eliot's) other undergraduate mentor, William James, had a mind much fuller and richer than Babbitt's

- often utter any thing which is not invited and gladly entertained by men around him.) Race 中のいし近。(The hearing ear is always found close to the speaking tongue, and no genius can long or The Complete Essays and Other Writings by R. W. Emerson The Modern Library, p. 547. English Traits, IV,
- past is the modern equivalent of the Tower of Babel; and so we should not be surprised if it is being stricken to be illusory, if men can really come together only in humble obeisance to something set above their ordinary men can meet expansively and on the level of their ordinary selves. But if this notion of union should prove selves, it follows that the great temple to humanity that has been in process of erection for several generations バビット(Democracy and Leadership, pp. 235-6) はこういうことを書いている。...the humanitarian assumes that

with a confusion of tongues

doubted the existence of matter, may be assured he has no aptitude for metaphysical inquiries." thoughts of the Supreme Being. (Op. cit., p. 31.) of nature as an appendix to the soul. We ascend (my italics) into their region, and know that these are the that the outward circumstance is a dream and a shade. Whilst we wait in this Olympus of gods, we think the attention upon immortal necessary uncreated natures, that is, upon Ideas; and in their presence we feel has been observed to beget invariably a doubt of the existence of matter. Turgot said, "He that has never また、エマスンおよび'ascend'ということばの連関で、エマスンの次の一節が思いあわされる。Intellectual science It fastens

- (3) Initial, Daemonic, and Celestial Love, III, Celestial Love, 11. 42-3.
- いない。 Pensées de J. Joubert, Paris, 1920 p. 17. (Le ciel est pour ceux qui y pensent.) この随想はパピットは引用して

- 次のような随想を参照。「わたくしの観念! それを住まわせる家を建てることがわたくしの苦手とするところである。」
- ない!」(大塚訳、前掲書、三六ページ。) 次のような随想を参照。「探していたものが見つかった時には、見つかったといういとまはない― - 死ななければなら
- pation de son éméritat.) Pensées, pp. 24-56 (Il faut que les livres d'un professeur soient le fruit d'une longue expérience, et l'occu-
- らとは違う。その次世代がやってくる。まず、その機敏にして大胆なそ撃兵、軽装部隊がやってくる。次いで巨大な本隊 けがこの一般的な破壊をまぬかれることができる。第一の種類の作家はこんこんとわき出る真理の大きな泉であり、その 踏み越えてゆく。多くのかつての大衆的名声、多くのかつての託宣的権威は不幸にも失墜崩壊する。ただ二種類の作家だ がくる。それは前世代の堂々たる軍隊を自信をもって攻撃し、弾丸もてその身体に蜂の巣のように穴をあけ、その死体を れは一時的に受け入れられるにすぎない。この相違はどうして生じるのであろうか。一世代の趣味と思想は次世代のそれ 同じ性格であり、同じように不滅のはたらきをし、同じように永遠の興味を吹きこむと認められる――後続の仲間の大部 れで、これらの人たちは神聖な名士である。第二の種類の作家は新世代の先発隊によって神聖な名士と同じ家族に属し、 かし、天才が人間生活について下す「人生の批評」は人類にとって永遠に受け入れることができるものである。才人のそ のみ称賛される。どこが、どう違うのだろうか。これら二種類の人たちの作品は根底において「人生の批評」である。し る。彼らは永遠に称賛される。また、文学には有名な才人 (men of talent) がいる。 彼らは彼らの属する世代によって とだろうか。文学には有名な天才(men of genius)がいる。ホメーロス、ダンテ、シェイクスピアのような人たちであ かった。死去した今となっても有名になることはないであろう。しかし、文学において「有名な」とはどういう意味のこ 「人生の批評」は人類全体にとって永遠に啓示と歓喜との源泉である。ホメーロス、シェイクスピアのような人たちがそ アーノルド (of. cit., pp. 209-10) はジュベールの存在を次のように評価している――ジュベールは在世中、 -人たちである。新世代の先発隊の人びとはそういう人たちをさっとすくいあげ、安全な場所に置く。

かくして近づいてくる世代は彼らを圧倒し去ることはないかもしれない。ジュベールはそういう人たちの部類にはいる。

シェイクスピアのように大衆の尊敬を集めることはけっしてないであろうが、安全である。大衆にふみつぶされることは ないであろう。

ジュベール『随想録』(笠摩書房)、中川敏訳、マシュー・アーノルド「ジュベール」(世界批評史大系一巻、筑摩書房) の諸書、林憲一郎、尾形敏彦の諸氏のおかげをこうむった。記して謝意を表する。

(付記) 本稿を草するにあたって石田憲次『エマーソンとアメリカのネオ・ヒューマニズム』(研究社)、大塚幸男訳(抄訳)、